

ウェンデル・ベリーの宗教概念

ーエドワード・O・ウィルソンの「融合」批判を通して

今村正夫

1. 「融合」の問題とベリーの主張

本稿はウェンデル・ベリーによるエドワード・オズボーン・ウィルソンの「融合」批判を通して、ベリーの宗教概念を明らかにする試みである。ウィルソンが提唱する「融合」(consilience)は、彼の1998年の著書“Consilience”(邦訳『知の挑戦』)のタイトルであり、その中心的理論である⁽¹⁾。この書は、本人が講演の中で述べているように、人間のさまざまな文化的活動、また経済学、歴史学、政治学、倫理学、哲学、芸術、宗教にいたる分野など、およそ人間に関係するものすべてを自然科学の知見と枠組みで統合しようという壮大な研究である⁽²⁾。そして「融合」は、すべての「統一化の鍵」(Consilience is the key to unification)であるとウィルソンは述べている。したがってウィルソンの「融合」は、自然科学によるさまざまな専門分野の統合の試みであり、一つの理論といえる⁽³⁾。

ベリーは科学が多くの中で我々に利益をもたらしてきたことに同意する。特に今日の世界が自然科学の分野の貢献によって、様々な分野での繁栄があることを認める。しかし今日の科学がかつての「啓蒙思想」(the Enlightenment)以前の宗教がもっていたその権威のようにふるまい、我々はその科学とその応用によって極めて大きな犠牲を強いられてきたことを重視する⁽⁴⁾。この犠牲は、例えばレイチェル・カーソン

の『沈黙の春』(1962年)で警鐘を鳴らされたものの中に見出される。そこではDDTなどの農薬使用において科学物質の危険性が訴えられた⁽⁵⁾。自然科学における繁栄の一方で、我々と自然が犠牲を強いられたのである。またこの問題には、DDT使用と不使用のジレンマもみられた。こういった科学に発する問題の特徴として、ベリーは我々が、また自然が「科学に服従している」「科学に支配されている」ことを問題視する。この見過ごせない問題意識から、科学とは何か、はたして良いものなのか、さらに我々は科学の名で多くのものを許しているのではないかなどの疑問を提起する。

この疑問を主題にして書かれたのが、ベリーの2000年の著作『ライフ・イズ・ミラクル』(原書：“Life Is a Miracle”)である。この著作の中で、ベリーはあまりにも科学を擁護するウィルソンの態度を危険視する。特にウィルソンの「融合」理論の危険性を訴える。今や「融合」は、アメリカ社会に大きなインパクトを持ち、科学に服従する結論に満ちているためである。またウィルソンはベリーと同様、自然保護論者でもある。ウィルソンの、自然科学、とりわけ進化生物学と進化心理学に基づく「バイオフィリア」(Biophilia：生命的親和性向)思想は、自然保護の理論として影響を持ち続けている⁽⁶⁾。そしてこの「融合」は宗教にまで及んでしまった。宗教を擁護するベリーは、「科学(もしくは科学技術)が一種の宗教のようなものになっている」「科学が宗教や福音になる」「科学が世界を救う」「科学者はこの世界を救うための伝道者であり、世界を救うために仕事をしている」など、このような宗教化した今日の科学のあり方に断固として反対し、宗教が科学とは融合できないと主張する。ベリーは、科学やその専門知識の分野を終わらせようとする「非科学」を提案しているのではない。科学あるいは科学の応用によって、宗教概念のすべてを説明可能だとする科学至上主義を批判する⁽⁷⁾。

筆者の関心は、今日の科学あるいは科学の応用(科学技術)が宗教化

している、つまり科学への信仰告白がなされていることの問題である。そこで、筆者の研究対象であるベリーにおける彼の「融合」批判に注目した。ここでは、先ずウィルソンの「融合」理論の特徴を解説し、その上で宗教を取り込む「融合」について検証する。次にその「融合」に対するベリーの批判を通して、ベリーの宗教概念、つまり宗教の概括的な意味内容を明らかにする。最後にこれらの検討を通してあらわになった宗教の課題をまとめ、今日的な宗教の役割を提示したい。

2. 宗教を取り込む「融合」

ウィルソンは「融合」理論の組み立てに対して、啓蒙思想 (the Enlightenment) に注目する。その前提とは何か。ウィルソンによれば、非宗教でも反宗教でもない。法則に従う物質世界、知識の本来的な統一、限界のない人間の進歩の可能性についてであった。そしてこれらの精神活動は、客観的な証拠、とりわけ自然科学からの証拠によって自然科学と人文科学を結びつける試みで、正しい理解に到達しようとする行為であった⁽⁸⁾。ウィルソンによれば、啓蒙思想は挫折を経験した。知識の断片化が進み、すなわち統一された動きではなかったために、理性が理性の衰退をもたらした。その証拠に哲学の混迷をあげる。不釣り合いなほどの哲学者たちが輩出したことが彼の言う混迷である。啓蒙思想は理念としては統一の試みであったが、実際は統一された動きではなかった。これが啓蒙思想に対するウィルソンの主張である⁽⁹⁾。

ウィルソンによれば、啓蒙思想の原動力は科学であり、科学の有的な手法が「還元主義」(reductionism)である。そして還元主義の提唱者であり、唯物論者である(村上陽一郎氏は『科学史からキリスト教をみる』創文社、2003年、87頁で「哲学の先生から怒られるかもしれないが」デカルトを唯物論者として認める)デカルト(René Descartes)

をあげる⁽¹⁰⁾。還元主義とは、世界をばらばらに分解してそれぞれを別々に分析できる物質部分の集合として研究する方法である。デカルトが『哲学原理』(1644年)において、この地球とこの目に見える世界全体とを機械として、ましてや動物まで機械として、それらの形と運動のみを考察することができたように、還元主義は機械的な手法である。一般には難解な事象を比較的簡単な事例で説明するやり方である。ウィルソンは、この還元主義が理論に基づいてさまざまな問題を方程式にする数理解析モデルと合わせて、現代科学のもっとも強力な知的道具であると説明する⁽¹¹⁾。ただし、この還元主義の成功は全体として啓蒙思想の繁栄を阻害する方向に働いたと指摘する。科学の「情報」は増えたが、知識の「統一」が欠けていたからである⁽¹²⁾。この反省を踏まえ、ウィルソンは還元主義の分解・分析よりも統一に力点をおく。どうも彼の還元主義の手法をみると、まずは知的分野における類似性の発見に統一の手掛かりをみているようである。それを進化生物学や脳科学などの自然科学によって、さまざまな分野の統一を試みるやり方がウィルソンの提唱する「融合」と思われる。こうした手法によって、ウィルソンは宗教を「融合」して宗教、特にキリスト教の解明を試みる。

「融合」と似たような考え方で、科学と宗教(あるいは神学)の「連合」(Combination)を述べる神学者としてジェイムズ・A・ナッシュ(James A. Nash)、また「統合」(Integration)を主張する神学者I・G・バーバーがいる⁽¹³⁾。ナッシュによれば、科学と神学それぞれは異なっているが、相互が他の領域での能力に対して尊敬を払って顧慮し、互いに関連した問題を認識するとき連合しようとの考えである。この点では、「融合」と似通っているように思えるが、ナッシュは方法論的限界を認める。つまり神学はピクバン理論のような科学的問題に決着をつけることができないし、科学は科学として神学的判断をすることはできない。だがウィルソンは、このような方法論的限界を認めない。また

バーバーは、神のトップダウンによる統合を主張する。科学は量子的な不確実さにあり、神はその不確実さの決定者としてトップダウンの原因となり、組織的な発展、つまり統合を称賛する。しかしウィルソンは自然科学ですべてを説明できるとする科学のトップダウン、そしてその説明によって自然科学の支配を決定づけるボトムアップの擁護者である。

ウィルソンは宗教を論じるにあたり、先ず聖書に見出される目的と、科学の目的との類似性に注目する⁽¹⁴⁾。ウィルソンによれば、「聖書はただ単に、初めて文字で宇宙を説明し、私たち自身をその宇宙の重要な存在として位置づけるための試み」であった。「科学は、それと同じ目的を達成するための、より検討された新しい立脚点に立つ続編」である。「その意味において科学とは、解放され拡大された宗教である」。こういった科学と宗教についての類似性の言説は、啓蒙思想以降、科学が宗教にとって代わり、かつての宗教がもっていた権威を今や科学がもつに至った、あるいは取って代わったことの端的な表明になっている。

ウィルソンは宗教の難解さを認め、今日の科学ではまだ徹底的に解明できないと述べる⁽¹⁵⁾。しかし科学の関心が単純さではなく複雑さであり、さまざまな分野のものは還元主義の基に、単純な物理の普遍的法則によって還元できるというのがウィルソンの「融合」である。したがってウィルソンにとっては宗教は当然、「融合」の射程内であり、科学に従属する。

ウィルソンの宗教に対する還元主義の手法は、二つの段階を踏む⁽¹⁶⁾。先ず宗教を道徳的価値観（あるいは倫理的基準）と同一視する。次にその価値観を生物進化学や脳科学などの自然科学によって説明するやり方である。

最初のステップにおいて、ウィルソンは超越主義者（transcendentalists）と経験主義者（empiricists）に分けて宗教を説明する。彼にとって超越主義者は、道徳の指針を人間精神の外に存在すると考える者である。

この考え方は、宗教を信じようと信じまいと関係ない。つまり道徳的価値観はそもそも独立のものだとする。一方、経験主義者は道徳の指針を人間精神の考案物とする者である。道徳的価値観が人間だけに由来することに同意する者である。

ここでウィルソンは一つの仮説をたてる。超越主義者における道徳的価値観はどこからくるのか。超越主義者はそれを明確に答えられない。そうならば、その答えはもう一つの経験主義から導き出されるのではないかと考える。つまり道徳的価値観は完全に物質的な心の産物である。この産物が1000世代以上にわたって部族の教義にしたがう者の生存と繁殖の成功を大きくし、結果的に道徳感情あるいは宗教的感情を生み出す「後成説の規則」(epigenetic rules)、つまり精神発達の遺伝的偏向が進化したものである⁽¹⁷⁾。このような説明を通して道徳的価値観とは、精神発達の生得的原則のもとで生まれる総意によって到達した決まりであると結論づける。

このようにウィルソンの理論に従いこの原則で生まれる宗教といえるものは、民族の起源や宿命、特定の慣習や道徳基準に同意する義務を負っている理由を説明づける神秘的な物語をよせあつめたものである。したがって、ウィルソンによれば道徳的信念あるいは宗教的信念というのは、人間から文化へとボトムアップに作り出されたものである。神やそのほかの非物質的な源から文化を経由して、人間のところまでトップダウンで降りてきたものではない。この点から、宗教は道徳的基盤の上に発生したものであり、なんらかの様式で道徳基準を正当化するために用いられてきたとウィルソンは主張する。そして、宗教に関しては客観的な証拠は経験主義を支持するものも反証となるものも、道徳的価値観の倫理よりも弱いが、少なくとも生物学から説明できると断定する。つまり、たとえば宗教的な歓喜にともなう情動は、明らかに脳障害の一つが日常のささいな出来事を含むあらゆるものに宇宙的な意味を与えたも

のである。またウィルソンにとって信仰心とは、心が生物学的に構築されたものであり、人類の精神が神の存在を信じるように進化したものと考える。

ウィルソンは宗教に対する自分の立場を明瞭にするために、理神論 (deism) をあげている。理神論は理性が明白な真理を知る知識へと導く、つまり神が理性の延長として理解されるとする考え方である。神の介在なしに世界が機械として進みづけるという「時計製作者」としての神のイメージは有名である。ウィルソンにとって神の証明は、主に宇宙物理学の問題だと考える。そしてもっと重要なこととして、神の存在は生物学や脳科学によって強く反駁されていることを支持する⁽¹⁸⁾。

その中でウィルソンは、人が神聖な物語を必要としていることに触れる。まったくこういった物語がなくなるのは悲しいことだとまで言っている。しかしこれもまた自然科学の手法によって道徳的であれ、宗教的であれ、信念というものは遺伝的、進化的な起源をもち、今後、複雑な人間行動の生物学的研究によって検証されると予言する。そして最終的な結果として宗教の帰着が世俗化であると説明する。それでも宗教が生き残る道があるという。その道とは宗教が経験的な知識と一致した人類の最高の価値観を体系化し、永続性のある「詩のようなかたち」(poetic form) である。これがウィルソンの宗教を取り込む「融合」に基づく宗教に対する考えである。

3. 「融合」批判によるベリーの宗教概念

ベリーはウィルソンの「融合」に賛成しない。宗教概念は「融合」理論とその科学的な手法と相容れないからである⁽¹⁹⁾。ここではウィルソンのいう科学とベリーのいう宗教のそれぞれの特徴から宗教が「融合」できない理由を三つあげる。

まずは「神秘」(mystery)の問題である。ベリーは「唯物論」(materialism)と「神秘」(mystery)との関係を述べる。この両者は「知識」(knowledge)と「無知」(ignorance), また「ウィルソン」が「知っていること」(what he knows)と「知らないこと」(what he doesn't know)とそれぞれ言い換えることができる。

ベリーはウィルソンを全くの唯物論者だとみなす。ウィルソンの「融合」によれば、この世界は法則に満ちた物質世界であり、物質世界のすべての法則が経験的に説明できるし、また経験的に理解できるものであり、これらすべての法則は科学的に証明に従うものである。つまり、ウィルソンは物質をこの世界の究極的原理とみなす立場、唯物論者である。こうした唯物論にしたがうとき、科学の主題は物質であり、経験的証拠や目に見える具体的なもの、計測可能なもの、計算可能なものに関わる方法を第一とすることである。したがって神秘は認められない。神秘は人間の無知であり、科学の未来のためにある。ウィルソンにとって無知のものは知られるはずのもの、その答えが探し求められるものである。

ベリーにとって究極の知識は、「無知の知」である。この議論に対して、ベリーは「生命」に対する考えを取り上げる⁽²⁰⁾。生命について考えるとき、生命を理解したつもりになることが危険だと警告する。生命が単純化され、予測され、機械的にされる、つまり生命が機械に還元されることである。ここで起こる最も危険なことは、生命を機械として知覚するならば、さらに生命が機械のようなものとして扱われ、生命になんらの神秘も認めないことになれば、その結果、見切りをつけられ、畏敬されないことである。したがってベリーにとって生命は、決して単純化され予測されるものではない。生命がコントロールされ、奴隷とならないためにも、生命は神秘的なものである。生命の神秘を認めてはじめて、生命への畏敬の念を抱くことができる。これが神秘を認めなければ

ならないベリーの主張である。

宗教には「証拠」がない。つまり物質がない。ゆえに宗教は機械ではない。こうした認識を持つベリーにとって宗教的信仰とは、一切の「証拠」がないと知ることである。したがってウィルソンが宗教を誤解しているとベリーは指摘する。そもそも宗教の証拠を論じること自体が宗教に対する誤解である。これをベリーは科学における「偶像破壊」と呼ぶ。ウィルソンの科学的手法は、単なる偶像化された宗教を破壊する行為ということだろう。

次に、「専制的な支配」(tyranny)の問題である。宗教的な態度をもって、科学はすべての主題を政治的・専制的に独占する問題である。これは、リン・ホワイト・ジュニア(Lynn White, Jr.)が指摘した主題である。リン・ホワイトは、かつてキリスト教の伝道師が専制的な支配の態度で神聖な森を伐採してきたように、科学と技術とは、人と自然との関係に対するこうしたキリスト教的な態度から成長してきたものであると述べる⁽²¹⁾。こういった態度も宗教に対する誤解である。ベリーにとって、宗教自体は政治的な態度ではない。こうした間違った宗教的な態度を取り入れているのが「融合」である。ウィルソンの「融合」は、すべてを視野に入れる宗教の支配概念のように、科学が見えるものを独占することで、何でも説明できることである。ベリーはこれを絶対確実な経験主義の説明のための共通基盤、つまり「教義」(dogma)とみなす。この用語に照らすと、経験的に説明できないものは何であれ排除されてしまう。したがって、科学でないものは何であれ科学になるべきであり、またなるだろうとするのが「融合」の目標である。そのためにも科学によるすべての解明と問題解決が行われる。

ここで、ベリーが取り上げる科学とその応用による問題をあげよう。科学はいくつかの問題を解決するために、核エネルギーの利用を発見した。今日、核エネルギーは軍事的利用だけでなく将来のエネルギー問題

から平和的利用における原子力発電所を生み出した。しかし核エネルギーをどのように利用するにしろ、核エネルギーはすべての人々にとって極めて危険なものであり、核廃棄物をいかに取り扱うべきかの問題を残したままである。また抗生物質の発見は医療において感染症の治療に大いに貢献したが、耐性を持つ細菌を生み出し抗生物質の乱用につながり新たな課題となっている。すなわち、科学による解決策が新たな問題を生み出し、それがさらなる解決策を求め、しかし裏切られたりして、我々に大きな不安を与えている。さらに科学は「頼まれてもいない」のに、万人の代理人としての仕事をしているかのように専制的で、独断的なのである。また、ベリーは1979年のスリーマイル島原子力発電所事故の直後に論文「原子炉と庭」(“The Reactor and the Garden”)を書いた。原子力発電所はエネルギー問題への解決を提案したが、多くの問題を引き起こしたことによって一つの問題を解決するだけであると論じた⁽²²⁾。こういったことが科学の「利用」において、多くの誤りと多くの失敗を生み出している。

この科学の「利用」の問題について、アメリカで最初にキリスト教信仰をもとにした環境倫理学の基礎をつくろうとした神学者を紹介する。ジョゼフ・シットラー (Joseph Sittler) である⁽²³⁾。彼は「地球の保護」と題する説教を通して、「利用」の基づく環境破壊が神に対する侮辱であると批判した。それは原子力でさえ神の救いの世界に属しているとして、原子力爆弾に反対し、人間と自然を破壊するために使われる原子力は、神のために利用されなければならないと示唆している。

ベリーは科学、その応用における支配がすでに限界づけられていることを知らなければならないと呼びかける。あまりにも科学は過大評価されているからである。ベリーはこのような限界を持つ科学の支配のあり方を、科学の「帝国主義」(imperialism) と呼ぶ。ベリーの帝国主義に対する見解を総合すると、帝国主義とは絶対的権威によるすべての領土

拡大と支配の意図をもつ概念である。「融合」はまさに、その意図がみられ、科学によるあらゆる分野の領土拡大における支配の概念があるとベリーは指摘する。ここでは述べられていないが、しかし宗教のいう支配と融合の支配とは明らかに異なる。その違いは目に見えるかたちでと目にみえないかたちで、あるいは「唯物論」と「神秘」の違いであろう。

三つ目は、「言語」(language)の問題である。ベリーは科学の還元主義が人間の経験や人間による意味づけを、人間が用いるいかなる言語によっても適切に言い表すことができるという前提にたっていると述べる。その言語は適切さに満ちた機械的なものである。しかし、そもそもこういった機械的論的思考法による言語の使用によって宗教を取り込もうとすること自体が間違っているとベリーは指摘する⁽²⁴⁾。確かに我々が使用する言語は、世界と生命について説明する上での分析的な力を持つにいたっている。けれども、同時にそこで用いられる分析的な言語が信頼されたり、尊敬されたり、親しみをもって愛情が注がれたりはしない。むしろ、我々が深く関わるために必要な多くの力を失わせているといえる。「融合」の目的が世界を救うことであるとしたら、その言語はあまりにも世界を救うに適切でない無味乾燥な言葉に還元されている。また「融合」の言語、例えば「科学でなんでも説明できる」という言葉が、それ自体にあまりにも重い負担をかけすぎてしまっている。言葉が言語自体に過度の信頼を寄せるにあまり、その結果として「科学がまだ知らないこと」も言わざるをえない。これをベリーは科学の「未来の所有感」(the proprietary sense of the future)と呼ぶ。こうしてみると、「融合」の持つ機械的な言語は、未来が独占され、生命の未来までもが搾取されてしまっているとしかいいえない。

ベリーにとって未来を語るときの言語は、愛情の言語でなければならぬ。特に生命の事柄においては、愛情や親しみに満ちた言語であるべき

である。未来や生命を語る宗教は、価値あるものを最終的に守るための親しみ、畏敬の念、愛情の言語を持つとベリーは述べる。そしてこういった愛情に満ちた言語こそが、自然保護の目的にも役立つという。これは、聖書の言明にもいえる。ベリーは聖書のどこにも「自然環境」を「使い尽くす」(use up) のを許すようなことなど書かれていないし、そのことを暗示する言葉も見出せないと説明する。むしろ反対に、聖書はすべての生き物と神との間には完全に親密な関係があると述べている。例えば詩編104編が有名であろう⁽²⁵⁾。また未来の言葉について言うと、預言者、黙示思想家は、終末に向かう新しいヴィジョンを身近なモチーフの言葉で表現している。これに関してはW・シブレイ・タウンナー(W. Sibley Towner)が「自然の未来」の中で検討されている⁽²⁶⁾。例えば、新しい世は豊かな世、平和、生命の躍動、死の克服・復活などで表現されている。科学はこのような言語に置き代わることはないし、置き代わることもできない。したがって、宗教は言語の点で科学的な手法と相いれないのである。もし我々が神秘の中で生きていることを認めるとき、その「生」を言葉で明確に説明できない。つまり証拠をもたないところで我々は生きざるをえないといえよう。

4. 宗教の課題と役割

このようにベリーの「融合」批判の強調点が科学と宗教の相違であることがわかった。この批判は、そのまま宗教の課題となっている。宗教は、世界と生命の神秘を重視し、帝国主義化するのではなく、未来に向けられた愛情の言語を持ち続けなければならない。そうでなければ、宗教はウィルソンの「融合」で還元されて単なる「詩」となってしまうだろう。そうならないためにも、我々は宗教をあまりにも分解して科学的な手法により還元してはならないのではないかと。

宗教と科学が相容れないとの議論は、アリスター・E・マクグラス (Alister E. McGrath) の『科学と宗教』(1999年)の中でもみられる⁽²⁷⁾。特に自由主義プロテスタンティズムに対峙する新正統主義にみられる。例えばランドン・ギルキー (Langdon B. Gilkey) は、神学と自然科学がそれぞれに独立したものであり、事物への異なったアプローチの仕方をもっていると主張した⁽²⁸⁾。彼の自然科学と宗教の違いの主張の中に、興味深いものがある。自然科学は「どのようにして」という問いに関心を向ける。一方、神学は「なぜ」という問いを発する。そして前者は第二の事由、すなわち自然の領域との関係を取り扱い、後者は第一の事由、すなわち自然の究極的な起源と目的を取り扱おうとギルキーは説明する。

宗教は問いをもって始まるというのがベリーの主張である。人間がどのような言語をもって適切に表現することができない故に、その限界を代弁して宗教は問いを発するのである。ベリーはこの問いを神学者のフィリップ・シェラード (Philip Sherrard) から学ぶ⁽²⁹⁾。シェラードは「知識」の確実性の問題をあげる。仮にものごとが進化しており、また人間の意識が他のすべてのものと共に進化しているとするならば、この進化の過程全体をとらえるための視点をどこから見出すのか、という問題をシェラードは投げかけた。ベリーはこれに同調して、環境とその中にいる生き物との関係をとりあげて疑問を投じる。すなわち、生き物は環境の中にいるだけでなく、その環境を構成するものであり、だとしたら、この関係を外からみるために、つまり環境に対する我々の関わりや影響を確実に予測するために、どうしたらこの関係の外に出ることができるのかという疑問である。我々は環境の中において環境自体について外からみることができないために、分からないのである。このような問いをもってはじまるのが宗教であるとベリーは主張する。したがってベリーの考えに基づいて言えば、問いを発することは無知の信仰を告白す

ることであり、つまりそれが宗教であると結論付けられよう。

アンドリュー・D・ホワイトが歴史を通して科学と宗教の闘争を述べているように、宗教は地理学、天文学、化学、物理学、解剖学、医学、地質学、経済学、そして科学全般に対して衝突した⁽³⁰⁾。そもそも宗教と科学が前面衝突したのは、地動説と天動説の論争であった。しかし正確にはカソリック内での進歩派ガリレオ・ガリレイの地動説派と保守派アレキサンドリアのプトレマイオス天動説派との論争で、それぞれが正統なキリスト教徒であることの主張の衝突であった⁽³¹⁾。その点から標宣男『科学史の中のキリスト教』（2004年）で論じられているように、近代科学がキリスト教の産物であるならば、我々は宗教の持つ宗教概念を通して世界の問題に対しては問いを発しなければならない⁽³²⁾。今日、科学の応用においてiPS細胞、ヒッグス粒子など新しい発見が繰り返されている⁽³³⁾。すなわち宗教は科学による「融和」に向かうのではなく、科学を含むこの世界に起こる問題に対して、問いを与えることが世界に対しての宗教の役割であるといえまいか。世界の分野と問題に問いを与えることで、宗教は新しい何かを創り出す価値基準をもつのではないかと考える。

注

- (1) ウェンデル・ベリー (Wendell Berry, 以下ベリーとする) については、拙著論文「大地の管理責任—ウェンデル・ベリーの思想より」『明治学院大学キリスト教研究所紀要第44号』（明治学院大学キリスト教研究所、2011年）で詳しく述べているので同論文を参照。エドワード・オズボーン・ウィルソン (Edward Osborn Wilson, 以下ウィルソンとする) については、佐倉統氏（東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授）による「解説—壮大なる野望とニュートンのリング」(E.O.ウィルソン『知の挑戦—科学的知性と文化的知性の統合』(山下篤子訳、角川書店、2002年に所収、原書: Edward O. Wilson, *Consilience: The*

Unity of Knowledge, Alfred A. Knopf, Inc., 1998, 以下『知の挑戦』とする), 367-372頁で詳しく述べられているので参照のこと。特筆すると、ウィルソンは1929年生まれ、現在ハーバード大学名誉教授で、比較動物学博物館の名誉学芸員、昆虫学者、生態学者、進化学者である。数多くの著作を持ち、池田清彦氏（早稲田大学教授、生物学者、評論家）が「ウィルソンが後生に対して発した生物多様性保全のためのマニフェスト（檄文）」と解説した『生命の未来』（山下篤子訳、角川書店、2003年、原著：*The Future of Life*, Alfred A. Knopf, Inc., 2002、同本で池田氏が解説、367頁を参照）など邦訳も10冊を持つ。佐倉氏によれば、ウィルソンの『知の挑戦』は、昆虫学、島嶼生態学、社会生物学、保全生物学、文化進化など、一見バラバラに見える分野を極めながらも、それらの地下水脈は見事につながり、そういった有機的な相互連繋をひとつにまとめたもので、単に「23年後の社会生物学」というだけでなく、20世紀を代表する知性が生涯をかけた集大成である。また佐倉氏は興味深い解説をしている。佐倉氏がアメリカで、ウィルソンの「融合」にぴったりの人間行動進化学会アリゾナ大会に出席したとき、アメリカの神学者がこの学会でこのウィルソンの著書『知の挑戦』に対する反論を発表した。それは「還元主義的な科学至上主義だけを強調することは、人々の倫理や社会秩序に悪影響をおよぼす」というものであった。しかし自分の立場はこれと異なると佐倉氏は述べて、ウィルソンの「融合」理論を高く評価している。もう一つ、ウィルソンについて、彼が著書の中で告白していることを説明する。アラバマ州生まれのウィルソンは、ケンタッキー州生まれのベリーと同じ福音派（Evangelical）が熱心に信仰される地域「バイブル・ベルト」（Bible belt）で信仰を育み、特にキリスト教根本主義（Christian fundamentalism）の南部バプテスト教会（the Southern Baptist Convention）の信徒として育った。ウィルソンによれば、「牧師のたくましい腕にささえられて水のなかに身を沈め、再び生まれる洗礼式を受けた。贖罪がもつ癒しの力も知っていた。信仰と希望と慈悲をぬきがたく身につけ、何百万という人たちとともに、救世主イエス・キリストが永遠の生命を与えてくれると信じていた。平均的な十代の若者よりも敬虔で、聖書は最初から最後まで二度読んだ。しかし大学生となり、性ホルモンが駆動する青春期の反抗的気分のなか

で、疑うことを選んだ』（『知の挑戦』、11頁）。ウィルソンの「融合」は、彼の著書“Consilience”のタイトルである。ただし邦訳タイトルでは『知の挑戦』とされ、また同本文ではその副題にあるようにConsilienceは「統合」と訳されている。本稿ではベリーの『ライフ・イズ・ミラクル—現代の迷信への批判的考察』（三国千秋訳、法政大学出版局、2005年、原書：Wendell Berry, *Life Is a Miracle: An Essay Against Modern Superstition*, Counterpoint, 2000、以下『ライフ・イズ・ミラクル』とする）の三国千秋訳にならないConsilienceを「融合」とした。

- (2) 佐倉統「解説」、367頁。
- (3) ウィルソン『知の挑戦』、14頁を参照。ウィルソンはめったに使われないConsilienceの言葉を好む。Coherence（「結合」「首尾一貫性」「干渉性」などの意）より好むのは、Consilienceが自分の理論である「融合」の意味の正確さを保っているからであると説明する。この言葉は、1840年に科学者・哲学者のウィリアム・ヒューウェルが『帰納的諸科学の哲学』のなかで初めて紹介したもので、説明の共通基盤をつくりだすために、事実と事実にもとづく論理を学問の諸分野にまたがって結びつけることによって、知識が文字通り「ともに跳躍すること」を指している。
- (4) ベリーによるウィルソンの「融合」に対する批判は、ベリー『ライフ・イズ・ミラクル』の「第3章エドワード・O・ウィルソンの『融合』」（27-119頁）にて議論されているので、第3章を参照。ベリーが取り上げる「科学」(science)は広義における体系化された知識と経験の総称を指す。ベリーによれば科学は「特殊な種類の知識、すなわち『事実としての知識』」を意味し、「基準によって正しいと証明できる知識、経験的な検証に耐えうる知識」である。以上は『ライフ・イズ・ミラクル』、21頁参照。「啓蒙思想」は、ヨーロッパで17世紀末に起こり、18世紀に全盛になった革新的思想である。合理的・批判的精神に基づき、中世以来のキリスト教会によって代表される伝統的権威や旧来の思想を徹底的に批判し、理性の啓発によって人間生活の進歩・改善を図ろうとした。以上は『デジタル大辞泉』（<http://kotobank.jp>）の「啓蒙思想」の項目を参照。
- (5) 『ライフ・イズ・ミラクル』、28頁。ベリーがウィルソンの「融合」に

関心を持つ理由の一つとして、ウィルソンがベリーと同じく自然保護論者であることによる。またレイチェル・カーソンの『沈黙の春』(Rachel Louise Carson, *Silent Spring*, 1962) については、ロデリック・F・ナッシュ『自然の権利－環境倫理の文明史』(筑摩書房, 1999年, 原書: Roderick Frazier Nash, *The Rights of Nature: A History of Environmental Ethics*, the University of Wisconsin Press, 1990), 200-208頁参照。ここで言われている問題はDDT使用に対する人体および自然への悪影響とマラリア撲滅のジレンマの問題である。

- (6) ウィルソンの「バイオフィリア」思想についてはナッシュ『自然の権利』, 209-211頁を参照。「バイオフィリア思想とは、彼の定義によれば、他の生命体、および生命のプロセスと「親和的な関係を構築しようとする」人間の精神的な性向のことである。環境保護は、親族関係の問題であり、生命への畏敬は遺伝情報への敬意の問題であるという考え方である。
- (7) 『ライフ・イズ・ミラクル』, 14, 21-26頁。
- (8) 『知の挑戦』, 14頁。
- (9) 同上, 14頁。啓蒙思想の挫折については22頁以降を参照。
- (10) デカルトの還元主義については、『知の挑戦』, 39頁参照。その説明によると、デカルトは終生カトリック教徒で、絶対的に完全な存在としての神を信じ、その神の存在は、心のなかにそのような存在の観念があることによって明示されていると考えた。それを考慮にいれたうえで、精神と物質の完全な分離を主張した。この手法によって精神を脇におき、純粋に機械的なものとしての物質に集中することができた。1637年から49年にかけての著作の中で還元主義が提唱され科学の知的道具となった。デカルトの『哲学原理』にて機械としての自然を考察したことについては、藤井清久『歴史における近代科学とキリスト教』(教文館, 2008年), 80頁を参照。デカルト『哲学原理』第三部, 188頁。
- (11) 同上, 39頁。
- (12) 『知の挑戦』, 71頁。
- (13) ジェイムズ・A・ナッシュ「キリスト教の生態学的改革に向けて」『Interpretation: 神学とエコロジー』(青木信仰訳, 1996年9月, No.39, 原題: Toward the Ecological Reformation of Christianity), 21頁参照。

- 『科学が宗教と出会うとき』(藤井清久訳, 教文館, 2004年, 原書: Ian G. Barbour, *When Science Meets Religion: Enemies, Strangers, or Partners?* HarperCollins Publishers, Inc., 2000), 265-280頁参照。
- (14) 科学と宗教の目的の類似性については『知の挑戦』, 12頁を参照。
- (15) 『知の挑戦』, 70-71頁。
- (16) ウィルソンによる「宗教」に対する議論は『知の挑戦』の「第11章 倫理と宗教」, 290-323頁を参照。
- (17) 後成説とは, 生物の個体発生について, あらかじめ完成たものがただ大きくなる(前生説)のとは異なり, 単純な構造に次々と新しい構造が不可されることで複雑な構造が発生していくという考えである。『デジタル大辞泉』(<http://kotobank.jp>)の「後成説」の項目を参照。なお邦訳『知の挑戦』では「後生則」と訳され(300頁参照), これは誤訳である。道徳的価値観, 道徳的感情など哲学における議論について, ウィルソンはイマヌエル・カントなどをあげている。本稿では取り上げない。この議論については, 『知の挑戦』, 302以降を参照。
- (18) ウィルソンの理神論については, ウィルソン『知の挑戦』, 293頁。理神論については, アリスター・E・マクグラス『科学と宗教』(稲垣久和, 倉沢正則, 小林高德訳, 教文館, 2003年, 原書: Alister E. McGrath, *Science & Religion: An Introduction*, 1999), 28-29頁参照。理神論の本質はジョン・ロックの『人間知性論』(1690年)でまとめられている。これは後期理神論の特徴となり, 理性が明白な真理を知る知識へと導く理神論の基盤となった。また「時計製作者」については, ニュートンの解釈者の一人, サミュエル・クラークが, ライブニッツとの往復書簡で, 自然の規則正しさについて記したものである。
- (19) ベリーによる「宗教」に関わるウィルソンの「融合」批判については, ベリー『ライフ・イズ・ミラクル』の「第4章還元と宗教」, 122頁以降を参照。
- (20) ベリーによる「無知」における「生命」の議論については, ベリー『ライフ・イズ・ミラクル』の「第1章無知」, 1-14頁参照。
- (21) リン・ホワイト・ジュニア『機械と神』(青木靖三訳, みすず書房, 1999年, 原書: Lynn White Jr., *Machina ex Deo: Essays in the Dynamism of Western Culture*, The MIT Press, 1968), 92頁。

- (22) ベリー「原子炉と庭」(原書: "The Reactor and The Garden," in *The Gift of Good Land: Further Essays Cultural and Agricultural*, 1981), 170頁。
- (23) ジョゼフ・シットラー (Joseph Sittler) は、シカゴ・ルター派でシカゴ大学神学部の組織神学の教授であった。彼の説教に「地球の保護」(The Care of the Earth, 1962)がある。自然を人間の兄弟と擁護したフランチェスコを、リン・ホワイトより10年早く擁護したことは有名である。ナッシュ『自然の権利』, 245-246頁参照。
- (24) ベリーの「言語」への注目は『ライフ・イズ・ミラクル』の7, 44-45, 51-52, 57, 132, 188頁。
- (25) ベリー『ライフ・イズ・ミラクル』, 131-132頁参照。聖書の自然に対する親密な関係の言葉について、ヨブ34:14-15, マタイ10:29-30, 使徒17:28, また詩編は、この世界に対する神の愛があらゆる個々の生き物を含むのであり、単に人種とか種族だけを含むのではないとベリーは述べている。特にヨブの最終章と詩編104編は、個々の生き物の差異を無視する科学の抽象的表現よりもはるかに自然保護の目的に役立つ内容である。
- (26) W・シブレイ・タウンナー「自然の未来」『Interpretation: 神学とエコロジー』(青木信仰訳, 1996年9月, No.39, 原題: W. Sibley Towner, *The Future of Nature*), 52-55頁参照。豊かな世については、エゼキエル34:25-27, アモス9:13など, 平和はイザヤ11:6-9, ホセア2:18など, 生命の躍動はイザヤ65:20など, 死の克服・復活はローマ5:12-14, Iコリント15:26, 35-57, イザヤ26:19などである。
- (27) アリスター・E・マクグラス『科学と宗教』, 56-57頁。
- (28) ランドン・ギルキー『天地の創り主』(原書: Langdon Brown Gilkey, *Maker of Heaven and Earth: The Christian Doctrine of Creation in the Light of Modern Knowledge*, 1959)。彼の主張については、マクグラス『科学と宗教』, 57頁を参照。
- (29) ベリー『ライフ・イズ・ミラクル』, 187-188頁。フィリップ・シェラード『人間のイメージ—世界のイメージ』(原書: Philip Sherrard, *Human Image: World Image*, Golgonooza Press, Ipswich, 1992), 72頁。
- (30) アンドリュー・D・ホワイト『科学と宗教との闘争』(森島恒雄訳,

岩波新書, 1939年, 原書: Andrew Dickson White, *The Warfare of Science*, 1876) に, 宗教とそれぞれの分野との闘争の歴史が検証されている。

- (31) 垣花秀武『宗教と科学的真理』(岩波書店, 1997年), 62頁参照。
- (32) 標宣男『科学史の中のキリスト教—自然の法からカオス理論まで』(教文館, 2004年), 87頁。
- (33) 「iPS細胞」(induced pluripotent stem cell) は, 人工多能性幹細胞と言われ, ES細胞(胚性幹細胞)で強く発現している遺伝子を通常の皮膚や肝臓の細胞に導入して, ES細胞と同じような分化万能性をもたせた細胞である。受精卵からつくるES細胞の場合に問題となる倫理的制約がなく, かつ拒絶反応が起こらないことから再生医療の分野で注目されている。「日本発の技術『iPS細胞』未来の医療を変える」では, 京都大学の山中伸弥教授らが2007年11月, 人工多能性幹細胞, いわゆる「ヒトiPS細胞」の樹立(半永久的に培養・増殖が可能なものを作成)を発表した。病気の発症システムの解明や再生医療への期待が高まっている。また「ヒッグス粒子」(Higgs particle) は, Higgs particle理論が持つ対称性を破るはたらきをする粒子を意味する。素粒子に質量を与える役割を担うものと考えられ, ビックバンによって宇宙ができた直後, 素粒子には質量がなかったが, 宇宙が膨張・冷却する過程で真空の性質が変化し, ヒッグス粒子が凝縮したため, 素粒子が動きにくくなり, 質量が生じたとされる。「『ヒッグス粒子』発見か, 毫も研究に協力」によれば, ヒッグス粒子は, 英エディンバラ大学名誉教授のピーター・ヒッグス氏が1964年に提唱し, 2012年7月スイスの欧州合同原子核研究所がこのほど質量の起源といわれる「ヒッグス粒子」とみられる新粒子を発見したと発表した。以上は『デジタル大辞泉』(www.jkn21.com)のそれぞれの見出しの解説を参照。